

子どものよりよい育ちをともに考える

ベネッセの情報誌

# これからの幼児教育

これからの幼児教育 2012 夏

2012年5月30日発行 発行人 新井健一 編集人 後藤聖子 発行所 株式会社ベネッセコーポレーション ベネッセ次世代育成研究所 ©Benesse Corporation 2012

表紙／裏表紙

栃木県 ● 認定こども園あかみ幼稚園

『これからの幼児教育』刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

『これからの幼児教育』は全国の園長先生に無料で年3回お届けしています。

次号(秋号)は2012年10月上旬発行(予定)です。

第1特集

## これからの園運営を考える

～変化の中で子どもの育ちを支える園とは～

インタビュー ● 白梅学園大学教授 無藤 隆 / 白梅学園大学学長 汐見稔幸

第2特集

保護者との信頼関係を築く

## 全国の園の23のポイント

新連載

NEW どう見る? 子どもの行動 「いざこざ」

園運営や保護者への発信にご活用ください

2 第1特集

# これからの園運営を 考える

～変化の中で子どもの育ちを支える園とは～



- 2 インタビュー  
「もっとよい保育ができるはず」と信じて、保育を見直し続ける  
白梅学園大学教授 無藤 隆
- 5 インタビュー  
これからの園に求められる21世紀型子育て支援システムとは  
白梅学園大学学長 汐見 稔幸
- 8 事例1 あかみ幼稚園 (栃木県・私立)
- 10 事例2 船堀中央保育園 (東京都・私立)
- 12 事例3 石浜橋場こども園 (東京都・公立)
- 14 データから見る幼児教育  
多様化する預け先と、預ける保護者の意識

18 第2特集

# 保護者との信頼関係を築く 全国の園の 23のポイント



- 18 インタビュー  
保育者に求められるのは「わかってくれる存在」としての  
保護者支援  
白百合女子大学教授 秦野悦子
- 20 全国の事例  
保護者との信頼関係を築く23のポイント

24 新連載 NEW

## どう見る? 子どもの行動 いざこざ

「これからの幼児教育」2012夏号 2012年5月30日発行

発行人 新井 健一	企画・制作 ベネッセ次世代育成研究所
編集人 後藤 憲子	印刷・製本 凸版印刷株式会社
発行所 (株)ベネッセコーポレーション	編集協力 (有)ペンダコ、二宮 良太
〒163-0411 東京都新宿区西新宿 2-1-1	撮影協力 ヤマガチイッキ
新宿三井ビルディング	イラスト協力 アサヌマリカ

©ベネッセ次世代育成研究所 ©無断転載を禁じます ※掲載内容は2012年5月上旬現在のものです。

## ベネッセ 次世代育成研究所 とは

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として、家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究と体系的な理念の構築を行います。

また、その調査研究成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家のかたがたに発信し、よりよい子育て環境をつくる一助となることを目指します。

本誌は  
無料です

## ベネッセ次世代育成研究所の発刊物は、 ご希望に合わせて園へお届けします

※ただし、複数冊をご希望の場合は、宅配料がかかる場合がございますので、あらかじめご了承ください。

### お手続き方法

電話、もしくは、ホームページよりお申し込みください。通常はお手続き完了から1週間～10日程度でお届けします。お急ぎの場合は電話でのご利用が便利です。

電話

0120-933-964 通話料無料

受付時間◎10:00～17:00 (日曜・祝日は除く)

※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。  
※携帯電話・PHSからもご利用になれます。  
※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は  
086-270-5037へおかけください。  
(ただし通話料がかかります)

ホームページ

インターネットで検索してください。

ベネッセ次世代育成研究所

<http://www.benesse.co.jp/jisedaikin/>

◎ベネッセ次世代育成研究所の発刊物のお申し込みと閲覧(PDFファイルのダウンロード)が可能です。

発刊物の紹介

### これからの幼児教育 A4判 24ページ

◎主な記事の内容(最新5号分)

- 2012年 春号 特集 子どもの力を引き出す園での信頼関係
- 2011年 秋号 特集 のめり込める遊びで幼児の心と体は育つ
- 夏号 特集 情報発信で保護者と「つながる」園をつくる
- 春号 特集 園の遊びがもたらす幼児期の学びの芽生え
- 2010年 秋号 特集 特別なニーズをもつ子に寄り添う保育
- ※上記以外のバックナンバーについてはホームページをご覧ください。

その他、幼児教育・保育に関する発刊物

- 第1回 幼児教育・保育についての基本調査報告書 (幼稚園編・保育所編)
- 幼児の遊びにみられる学びの芽
- 保育所での子どもの発達と保育のポイント



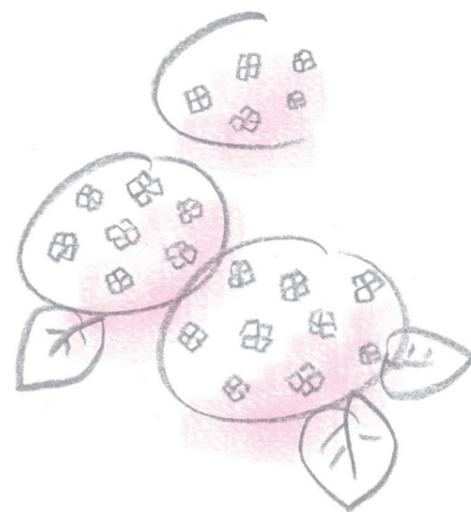
はじめに

子どもたちはそれぞれの新しいクラスの雰囲気慣れ、園の生活も少しずつ落ち着いてきた頃だと思えます。新年度のクラスの保護者の期待に応えつつ、一人ひとりの子どもの育ちをいかに支えていくか、先生がたの取り組みも本格化してきているのではないのでしょうか。

園に対する社会全体の期待も今、大きく高まっています。子育て環境が大きく変わる中、その変化に対応しながら子どもの育ちを支えていく保育の在り方を皆で考えることが求められています。

そこで今回、第1特集では現代の子育て環境を踏まえ、保育において何が変わろうとしているのか、そして何を変えてはいけないのか、識者の意見と園の実践例から考えていきます。また、第2特集では「子どもの育ちを支える土台」となる園と保護者の信頼関係をとらえ、その構築のための全国の工夫を紹介します。

幼児教育への社会の注目度が増す中、先生がたが「これからの園の在り方」を語り合うひとつのきっかけになれば幸いです。



# これからの園運営を考える

～変化の中で子どもの育ちを支える園とは～

幼児教育・保育は今、社会から大きな期待を寄せられています。子育て環境が変化する中で、一人ひとりの育ちをより豊かに支えていくこれからの園の在り方を考えます。

## インタビュー

### 「もっとよい保育ができるはず」と信じて、 保育を見直し続ける

今、幼児教育・保育のさらなる充実が求められています。その背景にある社会の変化や、今後、求められる幼児教育の方向性について、白梅学園大学の無藤隆先生にうかがいました。

#### 改善できる点を探し続けることで、保育の質は高まる

##### 園を取り巻く環境は どう変化しているのか？

現在、園を取り巻く環境は、多くの課題を抱えています。都市部の待機児童ばかりがクローズアップされていますが、さらに少子化が進み、今後、地方部では定員割れの園がますます増えていくでしょう。このような中で幼保、公私立、また子育て支援を含め、乳幼児の育ちをいかに社会的に支えていくか、まさに喫緊の課題といえます。

大都市圏を中心とした待機児童の問題を見てみましょう。すでに顕在化している待機児童に加え、おそらく一桁多い数の潜在的な待機児童がいると考えられます。この背景には、女性を中心として生涯にわたる人生設計をどうしていくかという社会的なテーマも横たわっています。子どもが小さい頃は育児に専

念したいという人もいますでしょうし、子どもがいてもフルタイムで働きたいという人もいますでしょうし、しばらく育児休業をとってから復職したいという人もいますでしょう。

これは園の問題だけではなく、女性の再就職を可能にするためのワークライフバランスや職業訓練、採用する企業側の雇用条件など、さまざまな要因が絡んだ問題です。これからの社会は多様な選択肢を用意することで、長い目で見て家庭と仕事を両立させたいという保護者の思いに応えていく必要があると思います。

そのうえで、園の視点で考えれば、各園で日々行っているような良質な保育をより多くの希望する家族や子どもにも提供することで、日本の子どもの育ちをより大きく支えることができるでしょう。



白梅学園大学教授  
**無藤 隆**

むとう・たかし

白梅学園大学子ども学部教授、同大学院子ども学研究科長。文部科学省中央教育審議会委員などを歴任。専門は発達心理学、教育心理学。著書に「保育の学校(全3巻)」(フレーベル館)など

##### 保育の質の向上に ゴールはない

変化の大きい今だからこそ、園の保育の質をいかに充実させるかは大きな課題といえるでしょう。

それでは、保育の質を高めるとはどのようなことか。幼稚園教育要領と保育所保育指針を見比べると、5領域の部分は同じことが書かれており、幼稚園と保育所ではまったく異なる保育をするようにとっているわけではないことを、まずはご理解ください。

その上で、どのように充実させていくことが重要なのでしょうか。それは企業で例えるとわかりやすいでしょう。「わが社には何の問題もない」と主張する企業は、ある時期、良い業績を上げていても、いつのまにか衰退の道を歩いていることがあるものです。優れた企業ほど、常に成長するために改善すべき点を自ら見つけ出そうとしています。

保育にも同じことがいえると私は思うのです。確かに多くの園で

は、それぞれに工夫し、子どもや保護者の信頼を得ているでしょう。しかし、それでよしとすることなく、昨年よりも今年、今年よりも来年に、よりよい保育を実現していくために「私たちならばもっと良質な保育が必ずできる」と考え、自分たちの保育を見直していくという姿勢を基本としてもつことが大切だと思います。

「自分たちは既に完ぺきだ」と思って満足したとき、そこから保育の質が向上することはないでしょう。今年うまくいったことが来年もうまくいくとは限らないのです。他の園を参考にしながら、自分たちの園の実情を踏まえ、よりよい保育を目指して努力する仕組みをつくるのが何より大切だと考えています。そのためにも、幼稚園教育要領と保育所保育指針を改めて読み直して、具体的な策を講じていく必要があるでしょう。

幼稚園教育要領と保育所保育指針は、小中学校の学習指導要領と比べ、具体的な内容が細かく書かれて

いません。小中学校などと違い、教科書がありません。ある意味、漠然としているのですが、そこにはよさも難しさもあります。そもそも教育や保育は、今、目の前にいる子どもを幸せにすると同時に将来、生きがいをもって生きていくための素地をつくるというふたつの目的があります。このふたつを同時に実現するために、幼児教育においては、各園がすべきことをそれぞれ工夫する必要がありますということです。小中学校に比べ、現場に任されている裁量と責任が大きいのです。だからこそ自己満足をせずに、自分たちで考え続けていく必要があるのです。

##### 保育を見直す 3つの視点

次に、保育を見直していく上で重要な3つの視点を述べましょう。

まず、保育中のエピソードに対し、学びのストーリーを描いてみることです。ある活動がどのような経験や学びにつながっているかを、保育者が集まって考え検討すること

#### 無藤先生が答える 現場の先生からのQ&A

##### Q 幼稚園教諭と保育士が協同していくには、どうすればいいのでしょうか？

**A** 同じ地域の子どもたちであれば、小学校に入る前の段階で乳幼児期に必要な経験を同じようにしているべきです。幼稚園だからこれをする、保育所だからこれをする、ということが、基本的にはあってはならないというのが大前提です。

とはいえ、幼稚園と保育所は100年以上も異なる歴史を歩んできたのですから、一緒になれば違いが表出することもあるでしょう。そういうときは、お互いに学ぶ姿勢が何より大事です。例えば、研修などで一緒に学ぶ時間を設けることは非常に意味があるでしょう。

幼稚園教育要領と保育所保育指針には共通の5領域があります。この共通の土俵を軸にすえて、地域の乳幼児に体験してほしいことをどう実現していくか考えてみてはどうでしょうか。それは大変な作業ではあると思いますが、とても大きな意味のある大変さだと思います。



インタビュー

# これからの園に求められる 21世紀型子育て支援システムとは

現代は子育てが難しい時代といわれます。今の時代に合った子育て支援とはどのようなものなのか、白梅学園大学学長の汐見稔幸先生にうかがいました。

## 園、家庭、地域が協同する21世紀型子育てを

### 社会の総力をあげて 子どもを育てる必要がある

子育てをめぐる環境が大きく変わった今、社会の総力をあげて子どもを育てなければならなくなっているというのが私の考えです。

21世紀は人類にとって答えの見つかっていない深刻な問題が次々と出てくる時代になることが分かってきました。経済もアジアに中心が移っていき、アジア規模で行動しなくてはならなくなっています。行動力のある柔軟な人材がなくてはならない時代になります。

こうした時代に対応するには、幼い頃から、発想力が豊かで、異なるということに興味を持ち、自尊心が高く、平和を大事にする、地球市民的な人間に育てていくことが大事になります。そのためには、「楽しい」「おもしろい」などと感じながら、自分がやりたいことを自分で見つけて没頭して遊び、それを大人にやさしく支えてもらいながら行う体験が不可欠です。

しかしながら、今は、そのような子育て環境が容易に手に入りません。例えば、「原っぱ」という言葉はもはや死語となってしまいま

た。かつて、子どもは原っぱや道端の中で自然に育ちました。もともと原っぱには道具がないため、自分たちで遊びをつくり出す必要があり、遊ぶことによって企画力、協力する力、柔軟な思考力などが培われました。しかし大人本位の社会となって原っぱが消えると、子どもの居場所がなくなりました。今では育児は、密室状態で行われ、子どもは親の顔をうかがい、気遣いをしながら育つ子もいるという状況です。親はイライラしやすく、子どもは大人の評価を過剰に気にしてしまいやすい環境といえます。

### すべての子どもの 育ちを支える 「21世紀型子育て支援」を

こういう状況の中で、子どもを育てるには、どういった工夫や配慮が必要になっているのか。一言で言うと、かつての原っぱの代わりになるような仕組みをつくり出すことが必要と考えています。

社会全体で子どもを育てるには、20世紀型から21世紀型の子育て支援へと移行しなくてはなりません。基本的には乳幼児期の子どもは家庭で育て、園という一時的な預け先

があるというのが20世紀型のスタイルでした。しかし社会の環境が変わり、20世紀型の仕組みでは全く不十分になってきています。

そこで、すべての子どもが活動に没頭したり、深く愛されている実感をもつことのできる21世紀型の子育て支援環境を急速に整える必要が生じているといえます。それは、すべての子どもの心や頭や体の柔



白梅学園大学学長  
汐見稔幸

しおみ・としゆき  
白梅学園大学学長・東京大学名誉教授。専門は教育学、教育人間学、育児学。著書に、『子どもの学力の基本は好奇心です』（旬報社）、『「格差社会」を乗り越える子どもの育て方』（主婦の友社）など。

で活動をより深めることができるでしょう。

そして次は、日常の保育での出来事をカリキュラムに結び付けていくことです。どの園でも教育課程や保育課程、指導計画などを作成していますが、それらが具体的な保育とつながっていないことが少なくありません。

例えば、公園を散歩して子どもがきれいな花を見つけたとしましょう。そのときだけで終わってしまうのではなく、翌日、みんなに気づかせたり、1週間後、1か月後にどのように変化するかを伝えることで、子どもなりの発見があって学びが起きます。このように日々の出来事と計画とを往復させて、その都度、カリキュラムの中に位置づけることが保育の質を高めます。

さらに、保育者自身の姿を見直すことが、3つめの視点です。子どもの姿をよく観察している保育者はたくさんいますが、自分自身を見つめ直すのはなかなか難しいことです。園内研修でそれぞれの保育者の保育を振り返ることができますが、限られた時間で行うのはやはり難しいものです。そこでひとりでも簡単にできる方法として、例えば保育中、ICレコーダーをポケットに入れておいてはいかがでしょうか。帰宅時などに再生して、自分が子どもにどのような声をかけたかを聞き直すだけでも有意義な振り返りとなります。これを行うことで、保育者自身がずいぶん変わっていくはずですよ。



### 保護者と地域を巻き込みながら 長い目で園を考えるメリットとは？

園長としては、こうした個々の保育者ができる見直しを推奨しながら、3年や5年など少し長い目で見て園全体の運営を考えていくとよいと思います。少し考えてみれば、例えば、保護者がお迎えに来たときに利用できる部屋がほしい、地域社会に対する掲示板を設置したい、保育者全員で研修に参加したい、など、さまざまな要望が出てくるでしょう。一度にすべてを実施するのは難しいと思いますので、優先順位を定めて改善を進めていくのが

トップとしての役割だと思います。

今後は、保護者や地域住民を巻き込んでいくことも、さらに重要なこととなるでしょう。保護者の要望は多様ですから、意見は聞きながらも、保育とはどのようなものであるかをしっかりと伝えていくことが何より肝要です。保護者や地域住民の理解が得られれば、地域社会が大きな支えとなり、ひいては行政を動かすことにもなるでしょう。自分たちの園だけではなく、地域社会とともに機能する新しい保育や子育て支援の仕組みをつくる時期がきていると、私は考えています。

### 現場の みなさんへ

**保育は難しいですが、おもしろい。**なぜなら子どもは日々変わり、成長していくからです。そういった保育の素晴らしさを実感できるのが保育という仕事です。子どもを感じる楽しさをさらに増し、やりがいを深め、将来への可能性を広げるのが保育者の専門性です。それは、毎日の保育を振り返り、また明日何をしようかと構想するところから生まれます。帰宅中にでもふと子どもの様子を思い浮かべて、また明日頑張ろうと思える保育者になってください。

軟な育ちを保障することなのです。

### 園の協力によって スムーズな育ちを支える

21世紀型の子育て支援への移行が必要な例を挙げましょう。

従来は、0～2歳児の時期でも、それなりの育ちの環境があったため、3歳になって園に入っても子どもはスムーズに育ちました。ところが、今は家の前の道路も車が通りますし、不審者の心配もあって、外で遊ぶことがうんと減っています。時には走るという経験もなく幼稚園に来る子どもが出てきています。当然、



体が十分に育たず、冒険の楽しさを知らず、好奇心やいたずら心などもうまく育たないまま3歳になって入園してくる子どもが出てきます。

そこで必要になるのが園、特に幼稚園の協力です。地域の子どもが1、2歳児の頃から、週1回でもよいので、園を訪れ、周りの大きな子どもをまねて遊べば、遊びのモデルを手に入れることができます。園としては、これまでにない取り組みを行うのは負担もあると思いますが、それぞれができることを提案するような形が望ましいと思います。園にとっても、乳児と共に時間を過ごすことで、子どもの育ちのつながりを改めて理解でき、幼児教育のおもしろさと大事さをより実感できることもあるでしょう。

さらに理想をいえば、園だけではなく、地域全体で子どもを支えられる小規模な施設があちらこちらに設けられれば、すばらしいと思います。地域の高齢者が集い、保護者が一時的に子どもを置いて、おじいちゃんやおばあちゃんに見てもら

える家庭的な雰囲気のある場所があれば、子どもの育ちに大きなプラスになります。このような取り組みが全国に広がれば、日本の子育ての環境は大きく変わるでしょう。

### 保護者と園が協同し 育児力を高める

幼い子どもを短時間でも預ければ、それをきっかけに外で働く保護者が増え、それが育児力の低下を招くという懸念がありますが、それは大丈夫です。現代は家事にかかる手間がなくなり、朝から晩まで子どもを見られるようになりましたが、人類史上、これほど保護者が子どもについて頭を悩ませて責任を負うという時代はなかったのです。子どもが他の子どもたちと思い切り遊べば、気持ちがスカッとして家での機嫌もよくなるでしょうし、保護者もゆったりと余裕をもって子どもと接することができ、より充実した親子関係がつくれると思います。

また子どもがけんかしたり転んでしまったりしたときに、すぐに手

を貸そうとする保護者を、「少し見てあげてくださいね」と保育者が声をかけ、子どもが自分たちで解決する姿を見せることは、深い意味での保護者支援となります。

保育に携わるかたにはぜひ、社会全体で子どもを育てる21世紀型の子育て支援について考えていただきたいと思います。今後は、これまで以上に多様な育ち方をした子どもが入ってくるからこそ、保育をいちから見直す必要があるでしょう。現状のまま本当に大丈夫なのか、子どもがキラキラとした目をして過ごしているか、子どもの育ちにとって本当に必要なものは何なのかなどを、みんなで考えていくことが、すべての子どもの育ちを支えることにつながると考えています。

### 感情やコミュニケーションが 保育のキーワードになる

ここまでの話の中で、これからの園では特別に新しいことを始めなければいけないと感じた方もいるかもしれませんが、確かに新たな時代に合った保育へと見直していく必要はありますが、決して堅苦しく考える必要はないと思います。

例えば、今後ますます社会や日常生活の中にコンピュータが浸透していくでしょう。人間は、計算をしたり記憶をしたりする力は、到底、コンピュータにはかないません。そのため、コンピュータには備わっていない人間特有の力を育てていく必要があります。それは、例えば、



感性であり、感情、新しいものを生み出すデザイン力です。これからの保育では、それらが重要なキーワードになっていくでしょう。

### 変化をおもしろがる保育者が 増えれば保育の質は高まる

しかし、感情やコミュニケーションがこれからの保育のキーワードだといっても、そこに決まった形はありません。保育者一人ひとりが思い思いに工夫をすればよいのです。ちょっとした工夫によって、「子どもたちの目が輝いてきた」「おもしろい絵を描けるようになった」といったことの一つひとつが保育の

質を高めると、私は思います。

子どもの感情を引き出す保育は、一人ひとりの子どもと向き合う保育者が自ら考え出すものです。ですから、保育者自身が閉鎖的にならず、オープンマインドになって、いろいろなところに学びに向いてください。保護者や子どもの変化、それに伴う保育制度の変化などを学ぶことで、きっとこれまで以上に保育が楽しくなると思います。

子育て環境が大きく変化する中、自らの発想を生かした保育によって子どもや保護者の成長を楽しみ保育者が増えれば、日本の保育の質はさらに高まっていくでしょう。

## 汐見先生が答える 現場の先生からのQ&A

### Q 幼稚園教諭と保育士が協同していくには、どうすればいいのでしょうか？

A 短時間保育と長時間保育の幼児が同じ園にいと、必ずといっていいほど、保育者の間に考えの違いが生じます。これは、幼稚園と保育所とでは、長い歴史の中で保育者の保育や指導の観点が異なるので当然のことです。

ときには意見の衝突もあるでしょう。しかし、お互いを理解することを目指して本音で話し合えば、分かり合えるようになると思います。その際には、子どもの育ちを保障するという観点から、実際の事例をもとにして話し合うといいと思います。「このときの先生の立ち位置はいいのだろうか」などと、いろいろな考えの相違が出てくるでしょうから、それ

らを一つひとつ話し合っていくてください。

幼稚園と保育所では、保育記録のとり方も異なります。みんなで持ち寄り検討してみれば、子どものどこに着目しているかがわかりますから、合同の研修に活用してもいいでしょう。

幼保の保育者が完全に理解し合うのは時間のかかることですが、子どもの育ちのために冷静な議論を続けて溝を埋めてほしいと思います。



### 現場の みなさんへ

**失敗を恐れなくてください。**子どもがちょっとしたケガをするなど保育の日常に失敗はつきものです。しかし、普段から子どもを丁寧に見て、保護者とのコミュニケーションを大切にしていれば、決定的な失敗は起こりません。むしろ、**どんどん失敗をして、その中からたくさんを学んでください。**失敗をして一生懸命に反省している姿は、周囲から見ると、「とても良い先生」です。失敗をしない保育者に魅力はないのです。

次ページより、子どもが育つ環境の変化、子どもの育ちの変化に対応し、さまざまな工夫をしながらよりより保育を実現しようとしている園の事例をご紹介します。

変化の中で  
子どもの  
育ちを支える

事例 1

# 職員全員の目線を合わせて 保護者とともに成長を喜び合う

**認定こども園あかみ幼稚園** (栃木県・私立)

子育て環境の変化などに対応するために、認定こども園になったあかみ幼稚園。すべての子どもにとって最善の保育を実現するために、67名に上る職員との園の理念や方針の共有に特に力を入れています。

## 幼稚園教諭と保育士の価値観の相違は、園の理念に立ち戻って乗り越える

### 子育てを縁とした新たな地域コミュニティづくり

2007年より認定こども園となったあかみ幼稚園。子育て環境の変化が大きな理由だったと、園長の中山昌樹先生は説明します。

「近年、少子化や人付き合いの変化により、地域社会の中で子育てについて相談できる人が周囲にいなくなり、孤立する保護者が少なくないと感じるようになりました。しかし、かつての地域コミュニティを復活させるのは現実的に困難です。そこで、在園児以外の保護者への子育て支援の機能をあわせもつことで、子育てを縁とした新たな地域コミュニティをつくりたいと考えたことが総合施設を目指した理由です」

2010年には、敷地内の保育所が認可保育園となり、「幼保連携型」の認定こども園へと移行しました。さらに在園児以外の親子を受け入れて子育て教室などのイベントを開いたり、地域に開かれた公園を設置したり、また敷地内の一角には地域の母親が運営するカフェがあって手づくりやリサイクルの衣類を販売したりしています。このよう

に、従来の枠組みにとらわれない、就学前の子育ての「ワンストップサービス（※）」を提供する総合施設を目指しています。

### さまざまな価値観があるからこそ大切にしたいメッセージを共有

そのように保育や保護者支援を充実させる一方で、中山先生は幼保一体施設ゆえの運営の難しさも感じているといいます。

「職員や保護者の考え方が多様に

園長  
中山昌樹先生



なっていることを強く実感しています。きちんとした理念や方針を打ち出し、すべての関係者が共有しなければ、価値観がバラバラになってしまいかねません」

広大な園庭にはアスレチック施設など、子どもが伸び伸びと遊べる豊富な遊具があります。



子どもたちが昼食（給食）を食べる様子やメニューの写真は、毎日、ホームページで更新しています。

そこで園では、職員や保護者に向けたメッセージの伝達には特に力を入れています。中でも重視して伝えているのは、「すべての子どもにとっての最善の利益」を目指して認定こども園に移行したこと、遊びの中に学びがあるという「遊び保育」を柱としていること、また子どもの自主性や自律性の育成を重んじていることなどです。

こうした理念や方針を園だよりや研修で繰り返し伝えて共有することで、保育者と保護者が子どもの成長をともに喜び合える関係が築かれていくといいます。

幼稚園教諭と保育士の協働を円滑にするため、さまざまな配慮もなされています。

そのひとつが積極的な人事異動です。園では0、1歳児はシフト制、2～5歳児はクラス担任制をとっています。シフト制の保育者は時間外勤務はほとんどありませんが、夏季休暇などを取りにくい、逆にクラス担任制の保育者は時間外勤務が発生しやすいといった違いがあります。公平性を保つために総労働時間や給与体系は統一していますが、お互いの働き方への実感的な理解を促すために、定期的に人事異動をします。こうした体制は、子どもの各年齢の発達理解を促すことにもつながっています。

### 子どもを中心として幼稚園教諭と保育士が話し合い、育ちを支える

幼稚園教諭と保育士との間で、子どもの見方や声のかけ方などに違

いがあることもあります。

「例えば、幼稚園教諭は遊び保育の内容など教育の要素、一方、保育士は食事やトイレのトレーニングなど養護の要素に強い傾向があり、互いに学び合って保育の質を高めています」(中山先生)

年6回ほど実施している実践検討会も、保育者同士の子ども観や保育観の共有にとっても役立っています。日頃の保育を振り返りつつ、環境構成や子どもの発達などを検討する中で、幼稚園教諭と保育士の相互理解は深まり、園としての統一感がはぐくまれています。

また職員は67名に上り、仕事の身も異なるため、なかなかお互いを深く知り合えないケースもあります。そこで年に1、2回は「自然塾」と称して全職員で戸外に遊びに出かけて、園とは異なる環境の中で

研修を兼ねて交流する機会を設けています。

「ときには、保育者間で価値観などがぶつかることがあるのも事実です。そのようなときは、園の理念に立ち戻り、『どうして園では遊び保育を大切にしているのか』『何のための幼保一体化なのか』など、話し合うことを大切にしています。いわば園運営の羅針盤である理念さえしっかりとしていれば、保育者、そして保護者の価値観が大きくぶれることはありません。職員や保護者などのすべての関係者とともに、子どもの未来を見据えて、より充実した園づくりに取り組んでいきたいと思います」(中山先生)

### 子どもの育ちを支えるこの園のポイント

- ◎すべての保育者に園の理念や方針を繰り返し伝え、話し合うことで子ども観や保育観を統一していく
- ◎園の理念を保護者と共有し、ともに子どもの成長を喜び合う関係をつくる
- ◎保育者の総労働時間や給与体系は統一して公平性を保つ

### 認定こども園あかみ幼稚園

◎「遊び保育」を理念として、1万7000平方メートルという広大な敷地に、木製アスレチックなどの遊具やピオトープ、陶芸の窯（穴窯）などがあり、子どもたちは伸び伸びと育っています。

園長 中山昌樹先生  
所在地 〒327-0104 栃木県佐野市赤見町2041  
園児数 333名(0～5歳児)



※子育ての「ワンストップサービス」……ここでは子育てに関するさまざまな支援を1か所で提供することをさしています。

変化の中で  
子どもの  
育ちを支える

事例 2

# 園内研修への主体的な関わりが 保育者を育てる

船堀中央保育園 (東京都・私立)

かつては遊びなどに対して受け身な子どもが見られたという船堀中央保育園。園内研修を通して、子どもの主体性を引き出すという方針を共有するとともに、保育者の能力を高めることに努め、子どもの育ちを支えています。

## 全体研修で全員の意識をひとつにし、自主研修で保育者個々の能力をみがく

### 子どもの主体性を引き出すため「選択」する場面を設定

船堀中央保育園は、園内研修によって園の方針を共有したり、保育者の能力を伸ばしたりすることで、子どもの育ちを支えています。

特に大切にしている園の方針が、「自分で考え、自分の言葉で相手に意思を伝え、行動できる子どもを育てる」ことです。この方針は、保育者が集まって子どもの実態や課題、今後の保育などについて話し合う

中で決まりました。園を運営する社会福祉法人東京児童協会理事長の菊地政幸先生はこう説明します。

「かつては、遊びが一段落したとき、『先生、次は何をして遊ぶの?』という質問が目立つなど受け身の子どもが多いという実態がありました。本来、遊びとは、自然とわき出る欲求から生まれるものだと思います。子どもが受け身であるという課題意識をみんなで確認したあとは、いかに自分で考え、主体的に遊びに向かう子どもを育てるかを

理事長  
菊地政幸先生



追求してきました」

子どもを能動的な遊びへと誘うために重要だと考えたのが、保育者が一方的に与えるのではなく、子どもが「選択」をする場面をつくることでした。例えば、給食は、決められた席で食べるのではなく、ランチルームの中であれば、どこで誰と一緒に食べてもよいことにしました。この形態に切り替えてから、給食中の会話が弾むなど子どもたちがとてもいきいきとした表情でお昼のひとときを過ごすようになったといいます。また、給食は自分が食べられる量を自分で盛るようにしています。これも、子ども自身の考えや判断を尊重するという方針の一環です。

### それぞれの保育者が 特技をもち寄って高め合う

こうした方針を日常の保育に取

り入れるには、すべての保育者がねらいや手法を共有する必要があります。そのために重視しているのが園内研修です。

園内研修は、目的に応じて勤務時間内と時間外の2種類を使い分けられているのが大きな特徴です。

勤務時間内の研修は、土曜日に職員会議とセットで実施します。園全体で共有したい方針や職員が必ず身につけておくべき知識・技術などがテーマとなります。より良い環境構成について話し合うこともあれば、感染症についてテキストを読みながら学んだり、下痢・嘔吐の後片付けの手順を体験したり、AEDの操作を確認したりすることもあります。土曜日は子どもが少ないため、当番を除いて原則としてすべての保育者が参加します。

それに対し、勤務時間外の研修は自由参加となっています。こちらは、保育者が関心のあるテーマについて自主的に企画し、同じ法人の他の園を含めて参加者を募って実施します。特徴的なのは、それぞれの保育者が得意分野を生かして講師を務めることです。例えば、これまで、保育要録の書き方、コーチング、伝統遊戯、ダンス、ギターなど、さまざまなテーマの研修が実施されました。

「みんなで特技をもち寄って、引き出しを増やしていくのがねらいです。例えば、外部研修でベビーマッサージを学んだ保育者が、その内容を園内に広げたこともありました。若い保育者が講師になることもよくあります」(菊地先生)

### 研修を通して保育者自身の 主体性も引き出す

時間外研修のもうひとつの大きなねらいが、保育者の意識を高めることです。

「新任の先生の中には、常に『何をやったらよいでしょうか?』と尋ねるなど『待ち』の姿勢が目立つ人もいます。そんな先生にとって、自主研修に自分の意思で参加したり、自身が研修の企画や講師を務めたりする経験は、積極的な姿勢を引き出すスイッチとなります」(菊地先生)

時間外研修は年間約30回と頻繁ですが、園では配置や体制を工夫して参加しやすくしています。例えば、3～5歳は担任を定めず、約60名の子どもを6人の保育者で担当しており、配置を柔軟に考えています。また、乳児と幼児の担当者の

間でお互いのヘルプを常時行っており、同様に乳児の担当者も比較的自由に動けます。

かつては園内研修に対して消極的な保育者もいたといいますが、自主的な研修活動を通して保育者自身が積極的に動くことの喜びを実感し、自信をつけていきました。それに伴い、子どもの見方が前向きになり、子どもの主体性を引き出すという園としての方針をもっと大切にしていこうという考えが園内に育まれています。

### 子どもの育ちを支えるこの園のポイント

- ◎子どもの実態や育てたい子どもの姿を考えたり、共有したりする機会をつくる。
- ◎育てたい子どもの姿に近づけるために必要な園の環境構成や援助のあり方を考える。
- ◎子どもの育ちを支えるため、保育者の特技や強みを生かした研修を自主的に企画して行う。



船堀中央保育園で力を入れている「和太鼓」の自主研修の様子



土曜日に行われる時間内研修で、「子どもの遊びと環境」について学ぶ保育者

### 船堀中央保育園

◎「大きなおうち」を理念として子どもや大人みんなが支え合う家庭的な園を目指しています。「生きる力を育む」「思いやりを育む」「夢を育む」を保育の3本柱としています。

園長 菊地真琴先生  
所在地 〒134-0091 東京都江戸川区船堀2丁目23番10号  
園児数 120名(0～5歳児)



変化の中で  
子どもの  
育ちを支える

事例 3

# 保育時間の違う子どもが 一体となって仲良く過ごせる環境づくり

石浜橋場こども園 (東京都・公立)

石浜橋場こども園では、保育時間の異なる子どもやその保護者が、こども園で共に生活したり、活動に取り組んだりできるようさまざまな工夫をしています。特に3歳児クラスは、保育時間や園生活の経験が違う子どもたちが同じクラスで安定して過ごせるよう、発達にふさわしい環境を考え、工夫しています。

## 子どもも保護者も保育者も、違いを認め合い、一体となるための配慮

### 2008年度に 区で初の一体化施設に

石浜橋場こども園は、幼・保の4・5歳児の合同保育を6年間行い、2008年度に東京都台東区で初の幼保連携型の認定こども園となりました。幼稚園機能・保育園機能・子育て支援機能の3つの機能があり、幼児教育の充実をめざしています。

以前は台東区立の石浜幼稚園と橋場保育園が隣接した状態にありましたが、「東園」「西園」として園庭でつながり、一体的施設となりました。ふだんは、乳児が西園、幼児が東園で過ごしています。

給食施設が西園にあるため、給食の時間は幼児クラスも西園に移動します。東園で活動している環境をそのまま残しておくことができ、活動の連続性が保てるというよさがあります。

### 幼稚園教諭と保育士が 共に取り組む幼児教育

同園では、長時間保育児と短時間保育児が混合の3～5歳児の幼児クラスは、それぞれ幼稚園教諭と保育士がペアになって担任をしてい

ます。一般的に保育所の保育士は日によって勤務時間が異なるシフト制をとっています。しかし、同園では幼児クラスの担任はシフト制ではありません。幼児教育の時間を二人の担任が教育・保育計画に基づき、意図的・計画的に進めるためです。幼稚園教諭と保育士が共に環境整備、教材研究、翌日の保育の計画・準備を行い、保育に携わります。

また、同園では、2010年度から2年間、台東区教育委員会研究協力園の指定を受けて「乳幼児期にふさわしい環境を考える」というテーマで、製作活動の場面に視点を当てた

園長  
中山和佳子先生



研究に取り組みました。

研究を通して互いに学び合い、高め合う喜びを実感し、園の組織の一員として、日々課題意識を持ち一体となって取り組む姿勢や意識が高まってきているといいます。日常保育の環境についても検討し、改善に



取り組んでいます。

### 生活経験の違いを踏まえ 実態に合わせた生活をスタート

その一例として、園長の中山和佳子先生は「3歳児クラスの入園当初の環境改善」を挙げます。

同園の場合、幼児クラスのスタートである3歳児クラスは、2歳児から進級し、幼児クラスに入園する子ども(長時間保育児)と、新しく入園する子ども(短時間保育児)がいます。前者が15名、後者が20名です。長時間保育児と短時間保育児は経験や生活の実態が違うため、配慮が必要になります。

進級してきた子どもはできるだけ今までの生活の流れを崩さずに、新入園の子どもはあせらず自分のペースで安定できるようにしたいと同園の保育者は考えました。そこで初めから35名が一緒に生活するのではなく、2ヶ月程度、保育室を戸棚などで半分に仕切り、長時間保育児と短時間保育児が隣り合わせになるように環境を工夫しました。

園生活では、一人ひとりが安心して主体的に遊び出せるような環境作りが特に大切です。子どもの状況を深く捉え直しながら、日常保育の環境や保育者のかかわりを園は改善したと中山先生はいいいます。

園生活に慣れてくると、子どもたちは自分から興味・関心を広げていきます。2011年度の場合、4月下旬にはお互いの場を自由に行き来するようになり、自然なかかわりが生まれました。それを踏まえて保育者は、一緒に絵本を見る、プレイルームで遊ぶなど、楽しさを共有する機

会を意識してつくっていききました。そうして一緒に過ごす時間を次第に長くして、6月ごろから、35名での生活に移行しました。

3歳児は13時40分、4・5歳児は14時に、短時間保育児は保護者の迎えで順次帰宅します。長時間保育児は、短時間の預かり保育児と一緒に東園から西園に移ります。担任は、それまでの様子を遅番の担当に引き継ぎます。

「降園時間が異なるのを子どもたちはどう思うのか心配もありましたが、幼児教育の時間の終わりの会をクラスで丁寧に行うので、『また明日ね』と各々の生活のペースをつかんでいくようです」(中山先生)

### 保護者も行事に 参加できるよう配慮

長時間・短時間保育児では、保護

者の就労状況なども異なります。同園では、長時間・短時間にかかわらず、保護者に園の行事やPTA活動に参加してもらいます。運動会や子ども会はもちろんのこと、親子遠足や誕生会、保育参観などもあります。そのため、年間の行事予定は年度当初に配布し、参観ウィークを設けるなど、就労している保護者にも参加しやすい配慮が必要と中山先生はいいいます。

PTA運営は短時間保育児の保護者だけでなく、長時間保育児の保護者にも務めてもらっています。「子どもの笑顔のために協力し合う」「できるときに、できることに取り組み、保護者同士の交流を深める」ことを大切にしています。

子どもの育ちを支えるために、皆がそれぞれの違いを認め合い、知恵を出し合っています。

### 子どもの育ちを支えるこの園のポイント

- ◎園生活の違いや実態を踏まえ、一人ひとりが安心して過ごし、主体的に動き出せる環境作りを工夫する。
- ◎教育・保育計画に基づき、保育者(幼稚園教諭と保育士)が共に、意図的・計画的に幼児教育の充実をめざす体制をつくる。
- ◎保護者の就労状況などの違いも考慮して、行事やPTA活動に参加しやすい柔軟性のある運営方法を工夫する。

### 認定こども園石浜橋場こども園

◎2008年度、台東区立の石浜幼稚園と橋場保育園が一体化し、認定こども園となりました。教育目標は、「健康で明るい子ども」「心やさしく思いやりのある子ども」「自分で考え進んで行動する子ども」の育成です。

園長 中山和佳子先生  
所在地 〒111-0023 東京都台東区橋場1丁目35番1号  
園児数 定員133名(1～5歳児)



データから見る幼児教育

# 多様化する預け先と、預ける保護者の意識

ベネッセ次世代育成研究所は、2011年10月上旬、首都圏の認可保育園に入園申請をした母親967名に「保育園への入園の実態」について調査を行いました。園で家庭への支援を考える材料のひとつとして、また、保護者への発信にもぜひご活用ください。

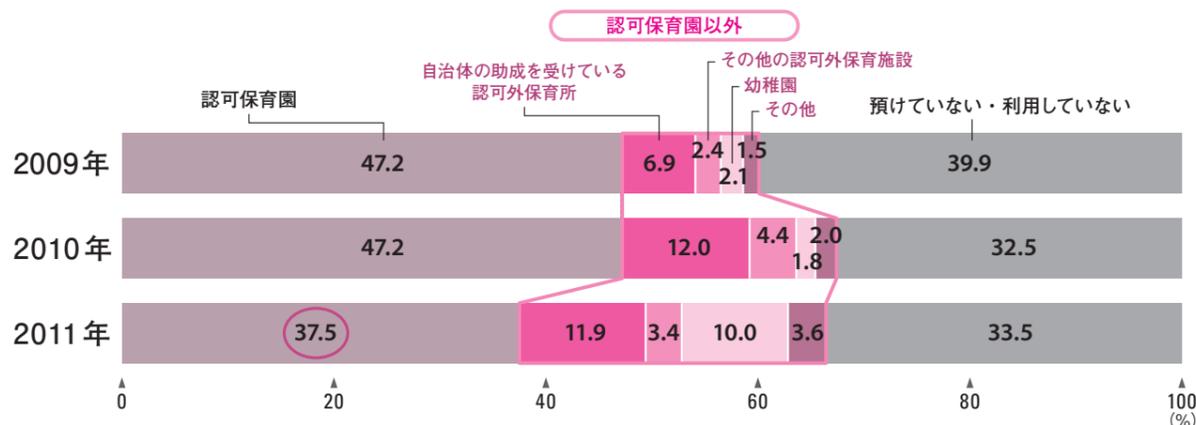
引用・掲載時のお願い 本調査の結果を引用される際には、調査名称を記載してください(例:ベネッセ次世代育成研究所「2009年～2011年 首都圏“待機児童”レポート(2011)」)。

出典:【2009年～2011年 首都圏“待機児童”レポート】  
 ■調査対象:各年(2009/2010/2011)の4月入園に向けて、首都圏の認可保育園に入園申請をした母親  
 ■有効回答数:2009年 720人/2010年 836人/2011年 967人  
 ■調査時期:2009年9月/2010年7月/2011年10月  
 ■調査地域:東京・神奈川・埼玉・千葉  
 ■調査方法:インターネット調査  
 ■調査項目:保育園入園申請・利用の実態、入園申請に向けての行動や意識、働いている理由など。  
 (2011年のみ) 保育施設について重要視していること・子どもを預けることについての考え・保育制度へのニーズ

## 認可保育園への入園申請者のうち、実際に入園できたのは37.5%

Q. 対象のお子さんについて、4月において入園・利用を決定された保育施設・サービスについて、あてはまるものをひとつ選んでください。

図1 4月時点での入園状況



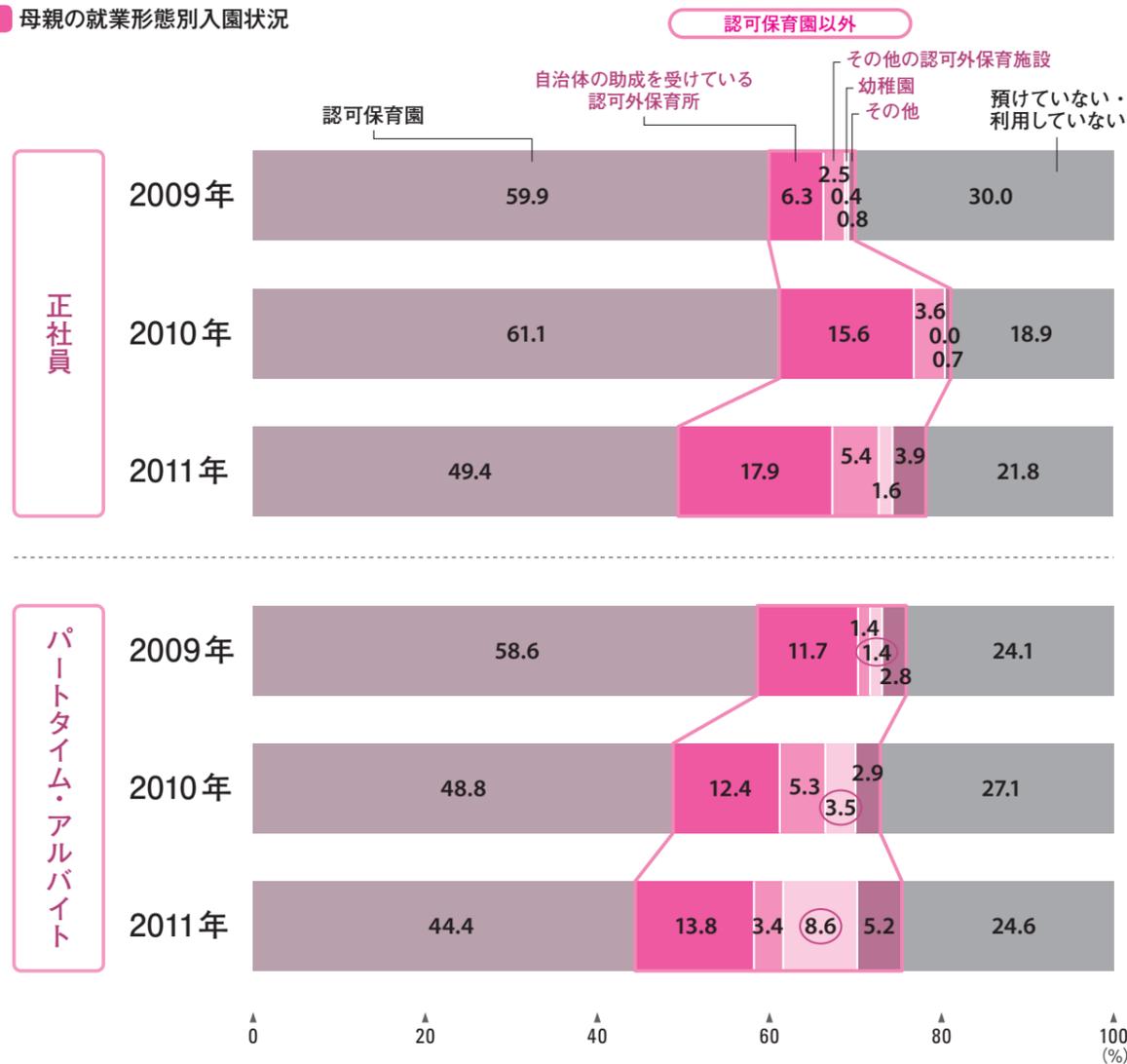
◎首都圏の認可保育園に入園申請した母親に、4月時点で利用を決定した保育施設・サービスについて聞きました。その結果、認可保育園への入園割合は2011年では37.5%となり、依然厳しい状況であることがわかりました。一方で2009年に比べると、認可保育園以外の預け先が増加しています。特に3～5歳児枠では、幼稚園の入園が増加していました(2009年7.2%→2011年29.3%、図省略)。また、「預けていない・利用していない」と答えた割合が2009年に比べて減少しています(2009年39.9%→2011年33.5%)、それには、認可外保育施設や幼稚園など、多様な預け先を利用できるようになったことも背景にあるのではないかと考えられます。

※「対象のお子さん」とは(2009年/2010年/2011年)4月度に保育施設・サービスに入園・利用申請した子どものことを指す。対象の子どもの年齢が2人以上いる場合は、末子を対象とする。  
 ※「その他」には、選択肢として用意した「市区町村の保育ママ」「認定こども園」「事業所内保育所」「ベビーシッター」「ファミリーサポート」を含む。

## 母親の働き方により、認可外保育施設や幼稚園に預ける割合が増加

Q. 4月において入園・利用を決定された保育サービスについて、あてはまるものをひとつ選んでください。

図2 母親の就業形態別入園状況



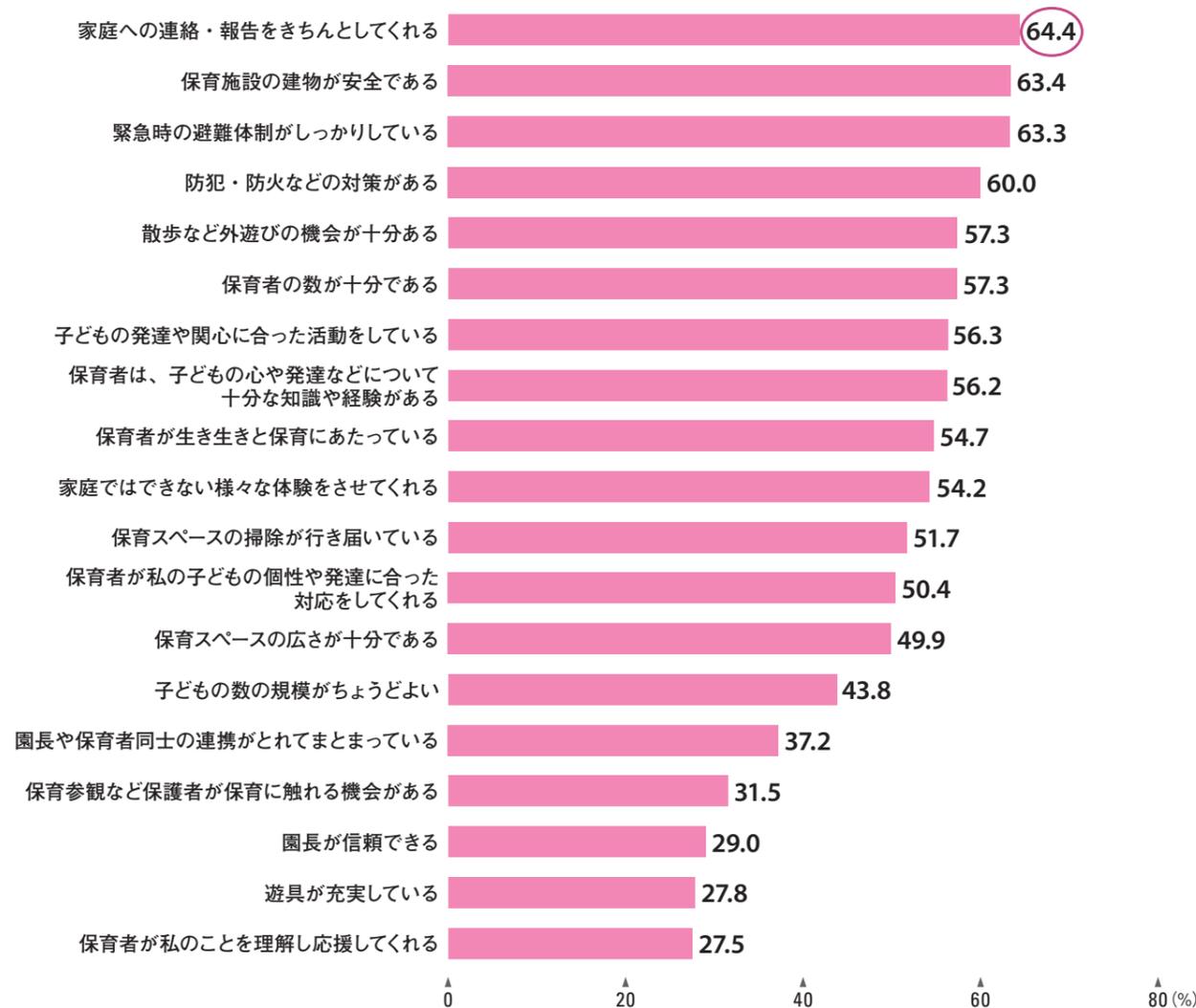
◎4月時点の預け先について、入園申請時点での母親の就業形態別に見ました。2011年で見ると正社員は認可保育園以外の預け先として、自治体の助成を受けている認可外保育所がパート・アルバイトより多く、パート・アルバイトは正社員に比べて、幼稚園に預ける割合が多い傾向がみられました。また、パートタイム・アルバイトの母親が幼稚園に預ける割合は、この3年で増加しています(2009年1.4%→2010年3.5%→2011年8.6%)。この背景には、働く時間を柔軟に決められたりする働き方の場合、幼稚園で実施している預かり保育などを利用して働きやすくなっていることがあるかもしれません。

※「その他」には、選択肢として用意した「市区町村の保育ママ」「認定こども園」「事業所内保育所」「ベビーシッター」「ファミリーサポート」を含む。  
 ※就業形態は入園申請時点のもの。

## 保護者は「家庭への連絡・報告」をきわめて重視している

**Q.** 保育施設的环境・設備・保育者などについて、お子さんを保育施設に預ける中で、あなたが重視していることについて、それぞれお気持ちにもっともあてはまるものをひとつずつ選んでください。

図3 保育施設に預ける中できわめて重視していること



◎園に預ける中で、保護者が重視していることについて聞いたところ、きわめて重視していることは「家庭への連絡・報告をきちんとしてくれる」という項目が最も高く、64.4%でした。ついで、東日本大震災の影響もあるのか、建物の安全性や、避難体制、防犯・防火対策などが続きます。また、「子どもの発達や関心に合った活動をしている」「保育者が生き

生きと保育にあたっている」など、保育内容や保育者の子どもへの関わりなどの項目もすべて5割以上の保護者がきわめて重視していることもわかりました。

※調査時点（2011年10月）、子どもを保育施設・サービスに預けている母親（607名）の回答のみ分析  
※「きわめて重視している」と回答した割合のみ表示

## 調査データを踏まえ、園運営について考える

今回紹介したデータから読み取れることや、今後の園運営に生かせることをお2人の先生にうかがいました。

### 子どもの様子をより伝えるために新しいメディアも活用したい

無藤隆

このデータは、認可保育園に入園申請した人が対象ですから、そもそも入園が難しいと考えて申請をしなかった人が相当数いると考えてよいでしょう。首都圏の実態を見ると、従来の認可保育園を整備するだけでは対応は難しく、社会全体として考えていかなければならない問題といえます。一方で地方では少子化の中で園の定員割れも起こってくる可能性もあるでしょうし、今後、保護者の働き方や預け方も多様化していくと思われますから、首都圏、地方を問わず、それぞれの地域ごとに工夫が必要になります。

保護者が預け先に重視していることのトップは、「家庭への連絡・報告」となっていますが、保護者は常に園での子どもの様子を気にしているものです。どの園でも園だよりなどで情報提供に努めていると思いますが、新しいメディアを使った方法を取り入れるのも一策です。例えば、子どもの姿をより伝えるために、デジタルカメラで撮影して、写真を携帯電話で配信している園もあります。保護者への情報提供は、保育や園の方針をしっかりと伝えるチャンスでもありますから、ますます力を入れていきたいところです。

### 働く母親の預け先として幼稚園への期待が大きくなっている

汐見稔幸

データで気になることのひとつが、2011年に認可保育園に入れた子どもの割合が大きく下がっていることです。認可保育園の数が増えない中、他の選択肢が増えたこともあり、預け先が多様化しているのではないのでしょうか。

一方で幼稚園に預ける割合が大きく伸びています。このデータは幼稚園に対するニーズの高さを示しているといえるでしょう。今後、幼稚園の果たす役割が大きくなっていくのかもしれませんが。



# 保護者との信頼関係を築く 全国の園の23のポイント

家庭との信頼関係を構築するために園長に求められる視点と、全国の園で実際に取り組みられている事例をご紹介します！

## 保育者に求められるのは 「わかってくれる存在」としての保護者支援

保護者との信頼関係づくりはどうして今、難しくなっているのでしょうか。幼児期の子育て支援の研究に取り組む白百合女子大学の秦野悦子先生に、信頼関係構築のためのポイントを解説していただきました。

### 保護者と園の認識のズレが 信頼関係の障壁に

多くの園にとって、保護者との信頼関係づくりは、近年重要な課題のひとつになっています。ではなぜ、信頼関係の構築は難しくなっているのでしょうか。その大きな原因のひとつは、園の考えと保護者の考えの間に生じたズレだと私は考えています。

例えば、近ごろの保護者の中には「園に入れてさえしまえば安心」「園に入ったのだから、先生がきっとやってくれる」と考えている人もいます。子育てをアウトソーシング(外注化)している、消費者感覚なのです。このような保護者は、子どもとの関係でうまくいかないこと、期待通りにならないことがあると外注先、つまり園の責任だと考えてしま

うこともあります。

しかし、認識のズレを生んでいるのは保護者の側からばかりではありません。ときとして保育者が「保護者なんだから、きちんとやるのは当たり前」と、保護者に対して「あるべき望ましい姿」を要求し過ぎていることはないでしょうか。ベテランの保育者と子育て経験の浅い保護者では、生活の中で子どもとの過ごし方が異なります。若い世代との家庭環境の違いを意識しないと、やはりそこにズレが生じます。

園のみなさんがお考えの通り、子どもは園と家庭が一体となって育てていく存在です。その考えにまだ共感できていない保護者がいるのであれば、園からも「一緒にやっていきましょう」というメッセージをどんどん発信していく必要があるでしょう。その意味では、園のさまざまな



秦野悦子

はたの・えつこ

○白百合女子大学文学部教授。専門は発達心理学(発達語用論 障害児のコンサルテーション 子育て支援)。川崎市健康福祉局こども施策推進部保育運営課保育巡回相談員(嘱託)。2006年より、わかふじ幼稚園副園長。日本発達心理学会常任理事。著書に『地域における保育臨床相談のあり方』(編著・ミネルヴァ書房)など。

行事や園だより、さらには日々の声かけなどは、園の考えを伝え、理解してもらうためのコミュニケーションの場としてとても大切です。信頼関係構築のためには、新しい取り組みよりも、こうした従来からの園の取り組みが十分に機能しているかをまずは検証したいものです。

そして、そうしたコミュニケーションを通して、一人ひとりの保護者が「園に何を求めているのか」「それはなぜか」をもっと理解しようとする姿勢、保護者とのコミュニケーションを通して気づいたことなどを他の保育者と共有し、広げていくことがこれまで以上に保育者に必要なのではないのでしょうか。

### 保護者の個性を受け止めて 関係をつくっていく

園と家庭が一緒になって子どもを育てるといって、保育者と保護者の間に子どもがいる様子がイメージできます。しかし保護者との信頼関係構築を念頭に置いた場合、保育者は、子どもを含めて家庭を包み込むというイメージの方がふさわしいように思います。

保育者がこうしたイメージをもつことで、これまでなら「もっとしっかりしてもらわないと困る」とときには不満や怒りを抱いてしまうような保護者に対しても、「この保護者とどう向き合うことが、子どもにとって最善なのか」を冷静に考えることができるように思います。

ふだん、子どもの個性に応じた保育を行うのと同じように、保護者の個性を受け止めたうえでの関係づくりが大事だと思います。

### 園長は家庭と保育者を 包み込む存在

保護者の個性を理解するためには、ちょっとしたことでも気軽に「先生！」と声をかけてもらえる関係を

つくる必要があります。保育者は自分が思っている以上に、端から見ると忙しく見えて、なかなか声をかけにくい存在のようです。園長からも「保育者に気軽に声をかけてくださいね！」と日頃から呼びかけること、そして保育者には、声をかけられたときには、しっかりとその言葉に耳を傾けてほしいということを伝えるとよいでしょう。

最近では、若い保育者の育成が課題となっている園も多いようです。若手の多い園では、園長は「経験が乏しいからと臆することはない」「具体的なアドバイスができなくても、耳を傾け、共感するだけでもよいこと」を伝えてあげてください。保護者は困ったことがあるとき、専門

家よりも「自分のことをわかってくれる人」に相談したいものです。保育者は幼児教育の専門家ですが、保護者にとっては「自分の気持ちをわかってくれる人」であることも大事なのです。

保護者への支援は、保育者の仕事のひとつであると、明確な認識をもつことが大事だと私は考えます。保護者と子どもを一緒に包み込むような、保育を通じた保護者支援は、カウンセラーでも医師でもなく、保育者だからこそできることです。保護者と子どもを包み込もうとする保育者を、園長はさらに大きな心で包み込み、まさに園が一体となっていくことが大切なのだと思います。





## 保護者との信頼関係を築く 23のポイント

全国の園長先生に保護者への働きかけから  
保育者間の目線合わせまで  
さまざまな工夫をうかがいました



### 保護者が話しかけやすい雰囲気をつくる

#### 1 何気ない会話の中にさりげなく メッセージを入れる

保護者に対して話す内容がいつも子どもの心配事だけでは、保育者の言葉をそのうち聞き入れてもらえなくなります。何気ない会話をたくさんし、その中に伝えたいことを織り込むことで「あ、そうなんですね」などと保護者も受け入れやすくなります。

(新潟県・私立幼稚園)

#### 2 毎朝の出迎え時に ひと言葉をかかわす

毎朝、早出の職員と共に出勤して、笑顔と明るい声で出迎え、ひと言葉か話をするようにしています。保護者とのコミュニケーションの場面が増えたからでしょうか、これまで行政に直接出されていた保護者の園に対する思いが、園長に伝えられるようになりました。

(茨城県・公立保育園)

#### 3 保護者からの相談には すぐに応じる

登園、降園時には保護者に気軽に声をかけて、おしゃべりしやすい雰囲気をつくるようにしています。その分、保護者に声をかけていただいたときは、なるべくその場でお話を聞くようにしていますし、どうしても時間が取れないときは、いつなら大丈夫か、時間を必ず伝えています。

(東京都・公立幼保一体施設)



### 子どもの様子や成長を伝える

#### 4 子どものよさや力を伝える エピソードを紹介する

保護者の気づかない子どものよさや力がわかる園でのエピソードを保護者に紹介して、家庭での子どもへの対応を改めて考えてもらうきっかけにしています。保護者からは「うまくコミュニケーションがとれました」「家で喜んで話してくれるようになりました」と感想をいただいています。

(宮城県・私立幼稚園)

#### 5 保育中のおもしろかったこと、 楽しかったことを伝える

保護者がお迎えにきた時に、特にその日にあったおもしろかったこと、楽しかったことをお話しするようにしています。子育ての楽しさを保護者に伝えることも園長の大切な役割だと思いますし、保護者が悩み事などを話してくれるようになりました。

(香川県・公立保育園)

### 一人ひとりを大事にしている姿勢を示す

#### 6 園児全員の名前を覚え、 家庭の様子を把握する

全園児の名前を覚えるようにしています。さらに、家族構成、生活環境、園への期待などを大まかに把握しておきます。欠席の連絡や相談事を受けたときに、適切な言葉をかけることができるように日頃から情報収集しています。

(千葉県・私立幼稚園)

#### 7 給食を一緒に食べた子どもの 保護者に手紙を書く

給食は、子どもたちと一緒に食べるのですが、同じテーブルを囲んだ子どもの保護者には、園長から手紙を書くようにしています。お昼休みに書いて、お迎えにきた保護者に渡します。そのようなコミュニケーションが功を奏したのか、保育料の滞納がここ3年間ありません。

(山梨県・私立幼稚園)



#### 8 育てほしい姿を聞き、 その成長を共に喜ぶ

4月、保護者に「どんなお子さんに育てほしいですか」と聞き、その願いに添って個別の計画を立てたり、連絡帳で成長を知らせたり、ともに喜び合えるようにしています。保護者には「自分の子どもをちゃんと見てくれている」と実感してもらうことができ、信頼関係が深まったと思います。

(富山県・公立保育園)

### さまざまな角度から保護者をねぎらい、励ます

#### 9 日々の子育ての がんばりをねぎらう

子育てについて、保護者をほめたり、ねぎらったりすることを心がけています。お弁当がおいしそう、髪の結び方がかわいいなど、ちょっとしたことをほめると笑顔になってくれます。関係がまだ築けていない保護者にこそいつも声をかけます。いつの間にかいい表情になってくれますよ。

(愛媛県・私立保育園)

#### 10 子育て以外のことでも 保護者をほめる

登降園時、保護者と言葉を交わすようにしています。「仕事で忙しいのに、お母さんも頑張ってますね」といったことから、「今日の洋服似合ってますね」など言葉の内容はさまざま。そうするうちに、保護者から「実は相談が…」と話しかけてくる場面が増えてきました。

(石川県・私立保育園)

#### 11 子どものよいところを 保護者に伝え、信頼の貯金を

若手の保育者には「日々の保育で見つけた子どものよいところを保護者に伝え、励ましましょう」と話しています。保育は人と人との信頼関係で成り立つもの。信頼の貯金を少しずつしていくことで、保護者とのつながりが育ちます。

(東京都・元公立幼保一体施設長)



## 12 「すべては子どものため」という基本姿勢を示す

特別な支援が必要な子どもの保護者は、こちらが想像する以上に「迷惑をかけている」という意識をもっていることがあります。大人同士の気遣いではなく、「子どものため」という姿勢を大切にしていることを折にふれて伝えるようにしています。(東京都・私立保育園)

## 13 保護者の行動の原因を複数の目で考える

子どもも保護者も行動には必ず意味があります。問題があるように見える保護者の行動も、なぜこのような行動をとるのかということを考え、その原因を除くようにすれば、落ち着くことがよくあります。支援するには、子どもと保護者の状況を複数の目でよく見て、正しく理解することが必要だと考えます。(東京都・元公立保育園長)

## 19 ノートを使い分けて重要事項を確実に共有する

小さい保育園なので園児全員のことを全ての職員が把握するようにしています。「緑のノート」は日常の連絡帳、「青のノート」は職員間だけで閲覧できるノートと使い分けています。大切なことをしっかり共有することで、保育者によって保護者への対応がばらばらになることも防げます。(神奈川県・公立保育園)

## 20 全員で子どもの様子を共有し保護者に安心感をもってもらう

担任以外の教職員とも何気ない子どもの日常について、保護者と会話できるような場をつくることを心がけています。保護者が誰にでも話ができるようにすることで、不安を引きずらなくて済むようにするためです。保護者からの情報は園全体で共有しています。(東京都・公立幼稚園)

## さまざまな形で対話の機会を設ける

### 14 誕生会を利用して対話する

保護者とのコミュニケーションを密にするため、誕生月の子どもをもつ保護者を招待して園長と話をする機会を設けています。誕生会には保護者にも参加してもらっています。園の方針、教育目標などをその都度伝えることで、園に対する信頼も高まっていると感じます。(奈良県・公立幼稚園)

### 15 月1回、園長と話す会を実施

クラス懇談会や講演会とは別に、月1回園長と自由に意見交換できる会を実施しています。対話の機会を多くもつことで、より一層細かいところまで保護者と気持ちが通じるようになったと思います。(東京都・私立幼稚園)

### 16 学期ごとに園長室を開放して相談しやすくする

学期ごとに園長室を談話室として1週間程度開放し、相談や要望を聞き、可能なものは実現してきました。自分たちの要望が園運営に反映されることを保護者が理解すると、次第に要望や相談の中身は個人的な内容から園全体の改善につながるものへと変化していきました。(東京都・元公立幼稚園長)

### 17 ほっとする言葉や草花で保育空間を彩ることで会話が広がる

園内に心がほっとするような言葉を掲示したり、庭の草花を飾ったりするなど、保育空間をよりよくするよう配慮しています。保護者へのメッセージにもなりますし、子どもたちからも花を飾る職員にお礼の言葉が出てくるなど、園全体の関係づくりに役立っています。(東京都・公立保育園)

## 園長が保護者と保育者の橋渡しを行う

### 21 若手の足りない部分を補い、がんばりをアピール

保育者と保護者との連絡帳を読み、特に若手保育者に関して、説明が足りないと感じた部分を、送迎時に保護者に話すようにしています。また、園長として感じた保育者のよさやがんばりをお話しして、保護者と保育者の間により関係ができるようにフォローを心がけています。(三重県・公立幼稚園)

### 22 担任の声かけを園長をはじめみんなでフォローする

保護者に対して言いにくいことを伝えなければいけない保育者がいた場合、担任以外の保育者や園長も保護者や子どもの様子を見て、声をかけて、フォローするようにしています。園全体で意思を統一したうえで見守っていることを伝えます。(神奈川県・公立保育園)

### 23 子どもの「先生が大好き！」が大切と伝える

若い保育者には保護者との関係づくりに苦手意識をもっている人もいます。私は「子どもに『〇〇先生が大好き』と家でたくさん話してもらおうことが、保護者からの信頼につながるよ」とアドバイスしています。わが子が好きな先生のことは、保護者は必ず信頼しますから。(神奈川県・公立保育園)



## 保育者間の情報共有を密にする

### 18 子どもの様子を共有することが保護者の安心感を生む

教職員全員はとても仲が良く、連絡も密にとれるので、保護者からは「どの先生に子どもの様子をお聞きしても答えてくださるので安心です」と言ってもらっています。何でも電話や連絡帳で質問をしてきた保護者が、いつの間にか園児募集にも力を貸してくださるようになりました。(宮城県・私立幼稚園)



秦野先生より  
現場のみなさんへ

◎保育者や園長の顔が見えてくると、保護者からの一方的な要求や苦情が減っていったと、いくつものアンケートにありました。保育者と対話できる関係になると、保護者は消費者感覚から、一緒

に育てようという気持ちに変わるのでしょね。こうした意識変化への働きかけも、大切な保護者支援のひとつ。先生がたには笑顔と自然体で胸を張って取り組んでいただきたいと思います。

子どもたちが日々見せてくれるさまざまな行動について、発達上の理解と援助という観点から解説します。

園内研修 保護者への情報提供にご活用ください。

今回のテーマ

いざこざ

## 解決の道筋を示しながら、人とかかわる力を育てる

### 昨日約束してたのに！

5歳・秋

5歳のハルカとユイ。積み木で遊んだふたりは、「明日もまたやろうね」と約束していました。ところが翌日、ハルカはほかのお友だちとリレーの遊びを始

めてしまいます。前日の約束を破られてしまい怒ってしまったユイ。園でもよく見られるこのいざこざ、大人はどのように見守るとよいのでしょうか。



翌日、ほかの友だちがリレーを始めると、ハルカはその仲間に入ってしまう。ユイは怒って、「一緒に遊ぶって約束したのに！」とハルカを強い口調で非難します。



ハルカは「ごめんね。あと1回やったら一緒に遊ぶから」と言いますが、ユイは「もういい！」と去っていきました。ハルカは困り顔です。



しばらく考えていたハルカは、ユイのところに向かい「ごめんね。やっぱり一緒に遊ぶ」とユイに謝りました。ユイも「いいよ」と言い、ふたりで積み木を並べ始めました。



保育者は2人のそばに行って「ちゃんと謝って約束を守ったハルカちゃんもエライし、許してあげたユイちゃんもステキね。ふたりで仲直りできるなんていいな。お姉さんになったんだね」と言うと、2人はクスッと笑いました。

こうした子どもの行動の意味を、どう見ますか？

発達にとつての意味は？

## それぞれが自分の思いを出すようになるといざこざも増える

いざこざは、ささいなめめごとのことであり、園では日常茶飯事です。着替えの際に体がぶつかった、おもちゃを黙って持っていったなど、ちょっとしたきっかけで起こりますが、あとを引くことはほとんどありません。

3歳くらいでは、自我もまだ十分に確立できておらず、相手にされたこともよく理解できないため、いざこざまでにはいたりません。しかし4歳くらいになると感情の行き違いからいざこざが起きようになり、5歳くらいからはさらに意見の対立などが原因でいざこざが起こるようになります。同じ遊びをしたり、同じ目標に向かって活動したりするようになると、意見を出し合う場面が多くなり、おのずといざこざが起こりやすくなるわけです。



大人のサポートは？

## 自分たちで解決策を見いだすために、状況を整理して伝える

4・5歳児の感情の行き違いを原因とするいざこざは、人と関わる力の育成に欠かせない体験と言えます。ささいな原因でいざこざが起こり、ちょっといやな思いをするけれど、解決してほっとする。この両方の感情を体感することが、相手の気持ちを推し量る素地となっていきます。

意見の食い違いからいざこざが起こった場合、自分の思いや考えを伝えることで、調整し、納得し合うこととなります。とはいえ、子どもたちはまだ自分の思いや考えを伝えるだけの表現力や理解力をもっていません。そこで保育者など大人には第三者として冷静にいざこざの原因や解決の道筋を整理してあげることが求められます。「よく話を聞いてみると、AくんもBくんも同じことを言っていたんだね」と「交通整理」して伝えることで、子どもも「こ

うやって解決していけばいいんだ」と理解することができます。

注意したいのは、泣いている子どものなくさめばかりに徹しないこと。「泣けば解決する」と子どもが誤解してしまいますし、泣くことで子どもなりに状況を説明する機会を失い、成長につながらないからです。言葉によるコミュニケーションを成立させながら双方が納得するよう、子どもの考えや気持ちを誘導していきましょう。

